

2023
特選
金融担当
大臣賞

第21回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

私のチョコレート経済学

東京都・東京都立田園調布高等学校 2年 杉田 珠江

「バイトしたいなあ。ほら、ここの時給1,300円だって。めっちゃ高くない？」
「ダメだよ。もったいない。」

ある日の私と母のやりとりだ。私がアルバイトをしたいと言うと、母は反対した。その理由は、私の学校でアルバイトが禁止されているからではない。高校生である今の1時間を“たったの”1,300円に換えてしまうのはもったいない、というのだ。アルバイトをする1時間があれば、友達とおしゃべりをしたり、勉強をしたり、読書をしたりできる。それらは高校生だからこそ思う存分できることなのだ、と。「高校生って、いろんなことを吸収して成長できる時期だから。そのことに気づいたのは、大人になってからだけ。」と母は言った。

なるほど、そういう見方があるのかと思った。私は1,300円という金額だけを見ていた。1,300円あれば、読みたかった本を買えるし、映画も見られるし、好きなアニメのグッズだって買える。自分が1時間働くだけでこんなにもできることが増えるのだ。「高校生の今の1時間を1,300円と引き換えるのはもったいない」という考えはなかった。

では、何円だったら折り合いがつくのか。

高校1年生の私の1時間にはどれだけの価値があるか考えてみた。

1時間アルバイトをするはずだった時間を友達と過ごしたとする。たくさん話して、あの先生実は結婚してたんだ、とか知らなかったことを知れるかもしれない。悩みを打ち明けて相談に乗ってもらっているうちに、何に悩んでいたのかさえ忘れて明るい気持ちになれるかもしれない。勉強を教えあって学校の授業ではわからなかった数学の問題が理解できるようになるかもしれない。

その1時間をお金に換算すると、いくらになるだろうか。1,300円より高いとして、いくらが妥当なのだろうか。

こう考えてみると、私の1時間の価値はお金の単位では測れないことに気づく。

悩みが晴れて、3回笑顔になれたり、4割気持ちが明るくなったりする、1時間で得たものの価値は円とは違う単位で表せるかもしれない。お金では測れない価値、プライスレスというやつだ。

私の1時間はプライスレス。1,300円に換えるのはもったいない。確かに母の言う通りだと納得しかけたそのとき、母は重要な点を見落としていると気づいた。

アルバイトで得られるものも時給だけではないのだ。

仮に、私が飲食店で働いたとしよう。厨房で調理や盛り付けを担当すれば、プロの技を学べる。お弁当作りのスキルが上がりそうだ。接客を担当すれば、コミュニケーション能力を磨ける。外国からのお客さんへの対応の中で自然と外国の言語を身に付けられるかもしれない。クレームの対応術を覚えたら、両親の夫婦喧嘩に巻き込まれそうになっても、その場を丸くおさめられるようになるかもしれない。

なんだ、と思った。アルバイトでも、お金で測れないプライスレスな経験ができるではないか。

母にアルバイトを反対された後、自分の部屋に戻って、こんなことを考えながらチョコレートを含口にする。私は勉強するときや考え事をするときに必ずと言っていいほどチョコレートを食べる。甘いものを食べると、より集中力が続く気がする。しかしその日のチョコレートは甘さの裏に寸分の苦さを覚えた。

それは最近読んだ新聞のコラム^{注)}が脳裏をよぎったためだ。近年、西アフリカをはじめとするいくつかの地域ではカカオの生産に携わる人達の低賃金労働や児童労働が大きな問題となっている。労働に見合う賃金を受け取れず、搾取されている人達が存在するのだ。私が普段食べているチョコレートも、そんな人達が支えている可能性がある。生産コストを下げれば、チョコレートの値段を抑えられる。消費者にとっては安く買えるほうが嬉しいが、そのために賃金を値切られる労働者がいると考えると、チョコレートが苦くなる。

これはチョコレートに限った話ではない。安価な商品を売りにしているファッションブランドでも同じような問題が起きているらしい。私が安い服を購入することが、誰かの賃金を値切ることに繋がっているかもしれない。

搾取されている労働者には児童も含まれる。私よりも年下の子ども達が過酷な労働を強いられているという事実が胸が痛む。友達と遊びたい、勉強をしたい、

自分でやることを選択したい、どれだけたくさんの湧き上がる気持ちを押し殺して1日十何時間も働いているのだろう。児童労働はまだ体が十分発達していない子どもが重労働や危険な業務をさせられているだけでなく、子どもから教育を受ける機会や子どもらしく過ごす時間を奪っていることも問題だ。

思いを巡らせていると、先程のアルバイトの話とつながり、ハッとした。

暖房のきいた部屋で、チョコレートをかじりながら、生活のためではなく、自分の好きなものを買うためにアルバイトのことを考える私には余裕がある。アルバイトをすればしたらどんな仕事をするか、選べる自由もある。

だが、強制的に働かされている子ども達は、働くことを望まないまま、やりたくない仕事をさせられている。本来支払われるはずの賃金を受け取れない上に、その時間で得られるはずの経験も奪われている。過酷な労働環境では、スキルを磨いて将来に活かそう、などと考える余裕もきっとないだろう。

児童労働をなくすために、私にできることは何だろうか。

服もお菓子も買う側にとっては安いほうがいい。だが、コストを下げるために児童労働をさせている商品を選ぶことは、児童労働を応援することにつながる。逆に、労働者の搾取が行われていない商品を買うことは、搾取にブレーキをかけることにつながる。

その商品が高いのか安いのか、私の1時間の価値と同じように、金額だけでは判断できない。その商品がどのように作られているかに想いを馳せ、本当の価値に見合った金額がつけられていると思ったものを買う。今過酷な労働で苦しんでいる子ども達をはじめ搾取されている人達を救えるのは、そんな心のゆとりだと思う。

想いを馳せる心の豊かさが、誰かの心に豊かさをもたらす。経済で思いやりも循環できる社会は今よりもきっと色づいているだろう。

想像を膨らませて、勝手に嬉しくなる。この1時間にも値段のつけられない価値があったようだ。

(注)

朝日新聞「天声人語」2023年2月14日